



六花

2

2020

りっかはいくかい

# 山田六甲

水の扉

# 紳

立て初めのティピカ珈琲すすりけり  
年祝 銀嶺 月山大吟 釀  
手を襖ぐ左手右手初えびす  
めでたさも鼠くらひなりおらが春  
寒鯉と吾の間の<sup>あはひ</sup>水消えし  
初夢に目つぶる力出しにけり  
寒鯉に魚眼レンズの空ひとつ  
書初の水滴によし醤油さし  
何取りに二階へ来しや初笑  
谷川の音の中なる去年の雪  
マシユマロのチャミーパミーで初笑  
仏の座摘み来し粥を供へけり  
神鍋や夜風の中の雪うさぎ

崎陽軒の

赤松君

日は長み背後で鳴ける帰宅ねこ  
真直ぐに川流れたき初景色  
寝違ひを起こしせし夜の嚏かな  
寒オリオン地球は水ををこぼさざる  
濠の水四百年を呑みし鯉  
水の鍵開けに来にけり梅の風  
投扇興正座の出来ぬ客ばかり  
牡丹鍋ひざつきあはせをりにけり  
朝書かば旦の書得て松の内  
雪風に耳美しき人とある  
繭玉の一人住まひを雨に辞す  
日本の風邪ひいて今日元気なり  
落椿水の扉を開けにけり

ね歳のその二  
立春の風の約束

笹村 政子

初時雨

雪嶺抄

大杉の空の移ろふ神送り  
踏む音の昂りきたる落葉かな

一村の歌舞伎棧敷に落葉舞ふ  
防人の恋の碑櫨紅葉

紅葉散る裏々おもて裏おもて  
車椅子母の目線に茶の咲いて  
行きずりの人の空似や初時雨  
あら炊きの醤油匂へり日短か  
園丁の手の止まりたる笹子かな  
荻枯れて通へる風もなかりけり

志方 章子

野菊

蟋蟀抄

どこへ行く当てもあらずよ秋日和  
吊し柿雨催ひなり取り込みぬ  
栗剥くに肩を凝らせてしまひけり  
虫の穴あいてをりたる栗の浮く

別世界銀杏黄葉の降りくれば  
落ち栗を拾ひ集めて栗ご飯  
天皇の御即位拝す菊日和  
礼砲の鳴り響きけり菊日和  
無患子の伐られてをりし生家かな  
アスファルト割つて野菊の咲きにけり

はまなす抄 久慈川 升田ヤス子

ふるさとは崩れ築さへ残らざる  
金欄の衣装干さるる出水後  
溝川の泥に埋まるひつじかな  
小春かな道の駅より荷のついて  
能舞台つつつと桜落葉かな  
つはぶきは石が好きなり石に咲く  
神留守の参道にゐる占ひ師  
牛糞をほどこす釣瓶落しかな  
小春日の暗渠出て水よろこべり  
振袖の模様となりぬ鴨の陣

藤生不二男

裂くるたび風のみだるる破芭蕉  
枝豆の茹であがりけり外は雨に  
近づけば瀬音たかぶる紅葉川  
蔓枯れて朱の極まる烏瓜

山眠る

山柿のたわわなる実をもて余す  
くれなゐのはにかむさまに酔芙蓉  
海峡の見ゆる山門初紅葉  
狼のいまも去りゆく奥嶺かな

山稜抄

山眠るほのかに笑まふ石仏  
茶の花の薬の黄をもて点りけり

雪卿集 せつけいしゅう

住田千代子

白粉花や路地ぎりぎりの救急車  
手のひらに湯気上げてゐる衣被  
小鳥来てつくばひの水騒ぎけり  
朝寒やゆつたり羽織る亡夫のもの  
取れさうで取れざる美男葛かな  
膝立てて爪切つてゐる長き夜  
糲殻の煙に深む奥丹波  
連山の晴れゆく霧の早さかな

善野 行

姪の結婚祝いに  
二人してさやけき日々をわかつべし  
落葉踏む音なつかしや北野坂  
魯田も刈田も水浸き神送  
白摺を終ふ夜の安堵神送  
刈田より身を濯ぐ風貫ひけり  
霧の朝堤の道に川見えず  
苔寂びし日溜に石路咲きにけり  
白菊や父母ありし日の親しけれ

永田万年青

散り際のいさぎよかりき銀杏かな  
神在の袖触れ合ふる男女かな  
栗の枝引き寄せてゐる崖の上  
落葉踏む痛める脚の軽きかな  
笑ひ栗密着したる実の三つ  
炊きたての丸ごと入りし栗ごはん  
秋深し草木に詩ありしかな  
一陣の風にはつさり銀杏の葉

出口 誠

花柄の毛布に眠る父がある  
布団には入る時からにつこりす  
たい焼きのクリーム甘し神農祭  
やきとりを食べて勤労感謝の日  
口の中やけどさせたるおでんかな  
カステラを買ひて勤労感謝の日  
冬麗に吸ひ込まれゆく我が視線  
虫喰ひの穴二三か所冬紅葉

谷口一献

枯葉舞ふ眼裏の痒くてならぬ  
枯葉散るとは解放の境地なり  
さよならのあとの真顔や枯葉散る  
冬紅葉晴着娘の赤ら顔  
西方へ吹く千の風山装ふ  
人殺す前に返納冬うらら  
洗濯物きちんと畳み暮れ早し  
することを書き留めて日を数ふ

田尻勝子

団栗を拾ふ男に降るどんぐり  
死の見ゆる日々や山には栗実る  
湾囲み海光する蜜柑畑  
神送り未来に君の流れゆき  
石路の花明るく咲くは淋しけれ  
柿紅葉頭垂れゐて動かざる  
神戸なる落葉は音立て坂登る  
数へ日の三十日は吾が誕生日

夢風撰巻頭

死の見ゆる日々や山には栗実る

田尻勝子

団栗を拾ふ男に降るどんぐり  
死の見ゆる日々や山には栗実る  
湾囲み海光する蜜柑畑  
神送り未来に君の流れゆき  
石路の花明るく咲くは淋しけれ  
柿紅葉頭垂れゐて動かざる  
神戸なる落葉は音立て坂登る  
数へ日の三十日は吾が誕生日

しのみゆるびびやまにはくりみゆる たじりかつこ

死が見え始めるのは、ある一定の年齢に達してから。特に身近な人が亡くなると、強く死を意識して常に脳裏を駆け巡る。そういう状態であろう。なにを見ても死につながる状態。この句は死と栗の実の取り合わせだから、やがて栗が下五にあったことを読者は忘れるにちがいない。しかし現在では私も覚えておこう。俳人は一生一句をめぐして毎日句と格闘している。田尻もやがてこの句を一元化して定着させるとよいだろう。今は「死が見える」という気づきを評価しておく。もちろん栗は日本人がまだ言葉を持たない頃、栗の実は主食だった可能性がある。食べ物と死は強い因果関係にあるが…。

# 雪樹集

廣畑 育子

江見 巖

蟪蛄の合掌姿のまま逝けり  
柿の木につながれてゐる神馬かな  
秋の昼拘束衣からパジャマへと  
秋さびし昨日は物を言えた父  
秋深むベッドに伝ふ鼓動かな  
爺ちやんと慟哭のあり暮の秋

コスモスを揺らせて行くや鼓笛隊  
仁王門の口の中まで石榴熟れ  
乙女等の寄りて竜胆開きたる  
車前草の踏んで通るや人ばかり  
赤のまま赤穂の城に入りこむ  
ピラミッド体育の日に低くなり

平居 濤子

大内 幸子

初鴨や着水の美を競ひあひ  
秋嶺のどこかに夫の忘れ物  
隕石は宇宙の秋思かも知れず  
改宗を強ひし領主や银杏散る  
行間にあふるる嘆き秋の文  
道行の場面辿りて近松忌

一本の孤高の银杏窓越しに  
目交に木の実時雨や杖の径  
おみくじを小春も結ひて古刹かな  
横断歩道優先的に秋の蝶  
畑の隅令和記念の柿を植う  
雪蛩天氣の崩れ予報しに

延川 笙子

延川 五十昭

波の果て小木の港の神送り さざれたる佐渡の荒海や神送り  
美女の来て御神酒酌みあふ神の留守 神送る 妓楼の鶴の大襖  
五匹ほど小春日和の猫会議 神送り有磯の海のしぶきをり  
晩年のかくはありたし山紅葉 断崖にましら鳴く声神送り  
山吹の実の黒々となりにけり 銀河見ずおけさの柿を嚙りけり  
一木を染め分けてゐる楓かな 掃く手とめ桜紅葉を眺めけり

螢雪譚 山田六甲

車椅子の母の目線に茶の咲いて



紅葉散る裏々おもて裏おもて 笹村 政子

無患子の伐られてをりし生家かな 志方 章子

これは紅葉の散った場面だが、散る宙でひらひら舞う、舞ながら落ちて表になったり裏になったりして積もるのである。その様を動的に絵画的に表裏の色を写し取つて言葉で楽しくリズムを取ったのである。私も昔「水の上に散った花の様子を」「さくら桃ももももさくら」と柳川水郷の春の光景を詠んだことがあるが、そのオマージュだろうか。私の句に刺激を受けてくれたなら嬉しいことである。

これなどは俳句として充分味わえる。子どものころに在った生家の無患子はその実で追羽根を作つたりして遊んだ楽しい思い出。だが久しぶりに生家へ帰ってみたら、その樹を伐られていた。その残念感と伐った者への憎しみまでつづる。おそらく相談もなく思ひ出を断ち切られたのだろう。私などにも無患子は宝の樹であったのだ。



六花集



北村ちえ子

古の湯に足つけて秋の風  
にぎやかに女性ばかりの足湯かな  
薄紅葉中に流れる有馬川  
樋破れ台風の雨溢れ出る  
くにやくにやと道路横切る蛇溝へ

磯野青之里

大屋根を越えて旋回稻雀  
秋の夜や湯舟で剥がすサロンパス  
成り年や枝葉ごと剪る富有柿  
残菊の褪せし紫畠の隅  
想ひ出を濡らすが如き時雨かな（追悼句）  
菊谷 潔  
行く秋や来る鳥もあるたのもしさ  
三日月になりてもてなす峠かな  
冬立つ日桜もみぢの入り日かな  
木枯しや皎月を研ぐすさまじさ  
燃え尽きて入日さす間のみじかな